

『八日目の蝉』を観て

川崎医科大学 臨床腫瘍学 山口 佳之

数年前から出張とかの折、待ち時間の暇つぶしに映画を利用するようになった。東京銀座で『仁義なき闘い』、香川で『雷桜』……。映画鑑賞は趣味ではないが、観た映画はすべて覚えているし、それ以来、作者が何を訴えたかったのか、議論することが好きになった。数ヶ月前、いつも自分のやりたいことばかりさせていただいている私は、家族への罪滅ぼしに映画鑑賞につきあった。意中の映画がなんだったかすでに忘れたが、そこはすごい人気で長蛇の列。そこは対照的に、人が少ない映画に変更したのだったが、それが『八日目の蝉』だった。

ご覧になった方もおられると思う。原本の小説からは少し脚色されているらしいが、あらずじはこうだ。ある夫婦にやっとできた赤ん坊（女の子）、その子をある女性が誘拐する。その女性は、子の父と不倫関係にあった末の犯行であった。夫婦は捜索願を出し、彼女は指名手配されるが、各地を転々とし逃げ続け、「母」となって女の子を育てる。その子が小学生に上がる頃、ある一枚の写真から足が付き、逮捕され、女の子は

本来あるべき両親の元に帰る。しかし、その子にとって両親は見たこともない大人であり、家庭はうまくいかない。女の子は誘拐した「母」を恨み、うまくいかない家庭の中で特殊な苦悩を背負い続ける。そんな彼女もやがて社会人となり、ひとり生きていく中で、彼女もまた家庭ある男性と関係し、身ごもる。ひとり母となる覚悟を募らせていく過程で、自分を育ててくれた「母」と過ごした過去の逃走の足取りを訪ね、思い出に触れていく間に、あんなに憎んだはずの「母」の自分に対する思いに気付いていく、というストーリーである。

映画が終わって、二十歳前の娘に聞いた、この映画が訴えたかったことは何か。娘は、自分の気持ちをうまく言えなかったようだが、子を思う母の気持ちのように感じたらしい。その後、多くの解説を読んだが、この映画のテーマは「母性」だそう。なるほど、母の子を思う気持ちに、確かに、私も涙した。ただ、私には、「母性」と『八日目の蝉』をつなぐことができなかった。

「普通であることの大切さ」。私

はそう感じた。娘は、「そう、それっ」と言って、言いたいのに表現できなかった心の中の引っかかりがすっと取れたように、すっきりした表情で私を見た。蝉はみな7日で死ぬという。8日目まで生き残った蝉の気持ち、眼前に広がる景色とは……。親の顔もわからないときに誘拐され、母でもない「母」に育てられ、だれも経験することのないこんな経験をした彼女。苦悩は私の想像をはるかに超えていよう。やがて本当の両親の元に戻ったとして、家庭がうまくいかないこと、尋常ではない自分の過去に、心閉ざし、自暴自棄となる。やむを得ないであろう。この映画の作者の言いたかったことは、「普通であることの尊さ」であったに違いない。

だが私には、もうひとつ、何かありそうで引っかかっていた。

外科医を離れて数年。標準治療が終了し、突き放され、路頭に迷う患者さんと数多く接してきた。まだ教室の体制づくりが整っておらずお恥ずかしい未熟教室だが、診させていただく患者さんは徐々に増え、現場を維持してくれている仲間に感謝している。その患者



川崎医科大学臨床腫瘍学医局恒例 YY スキーツアー（岡山県いぶきの里にて）

さんは、再発がんであることに、みなさん、否認、怒り、狼狽し、藁をもすがって来られる。がんを治すことは難しい、しかし、がんを克服することはできる。「がんになっても、最後まで自分らしくあり続けること、この世に生を受けた意味を全うすること、それができれば、がんを克服したとして胸を張ってよい」ジャーナリスト立花隆さんの言葉である。臨床試験や免疫療法を頼って来られるそんな患者さんに接するとき、自分らしく生きていく希望に、寄り添

わせていただきたいと思います。

『八日目の蝉』、それは「生き抜くこと」そのものを意味しているのではない。生い立ちであったり、家庭的なこと、はたまた容姿、体形的なこと、能力……考えてみれば、われわれは良しにつけ悪しきにつけ、だれも大なり小なり「普通」ではない境遇にある。それを負い目とせず、むしろ長所に代えよ、いや、長所に代えないまでもその中で、自分らしく強く生き抜け。そうすれば、生きる意味、この世に生を受けた意味が見

えてくる、それが『八日目の蝉』の訴えたかったことではないか、そう考えるに至った。

「がんと闘う」こともまた同じだ。そう思った。

